



国際誌エディターが教える アクセプトされる論文の書きかた

上出洋介 著

丸善出版 2,000円+税 A5判 223頁

教科書
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

今、日本の論文が危機にある。最近の調査によると日本発の論文は過去10年間減少し続けているという。そのうえ、論文出版数が減少している国は世界の中で日本だけなのだ。この驚くべき（そして、恐ろしい）統計結果に強い危機感を感じるのは私だけではあるまい。さらに、今年に入って社会問題にまでなってしまったあの論文不正事件が日本を襲う。日本の論文が量的に凋落し、さらに信頼性までも失おうとしているとすれば、私たちは今何をすべきなのかを真剣に考える必要がある。

本書の著者である上出洋介氏はこの危機感を誰よりも早く感じ取っていた一人である。上出氏はわが国を代表する宇宙空間物理学のリーダーであるが、Geophysical Research LettersやJournal of Geophysical Research—Space Physicsのエディターを計11年間も務められてきた経歴をもつ。そのほかにも、Space Science Reviewなど数多くの専門誌の編集に携わられてきた。その上出氏にこの本を著させた原動力こそ、実はわが国の論文を取り巻く危機感にあるという。この本はこれから論文を書こうとする若い研究者が世界に通用する優れた論文を多数生み出す助けとなることを企図して書かれているのだ。

ただし、この本は単なる論文執筆の指南本ではない。第一章を見てみよう。タイトル「論文発表は研究者の義務」は当然至極なメッセージだが、読み進むうちにその重さを感じずにはいられなくなる。著者は、論文の書き方を説く前に、まず論文を書くことの意味と意義をしっかりと読

者に伝えている。これが本書のユニークな点だ。

もちろん、正確でわかりやすい論文を書くことによって、研究は正しく理解され評価されるが、第三章「論文の提出から採択まで」と第四章「論文を書く基本から実際へ」では、そのための心構えと方法を豊富な実例とともに学ぶことができる。さらに、第五章「英語で論文を書くということ」と第六章「レフリーコメントへの具体的な対処」では、英語での論文執筆と出版に至る道すがりが丁寧に説明されている。

これほど体系的に論文について書かれた本はおそらくほかに例がないのではあるまいか。私はこの本を読むうちに、これまで学生にどれほどしっかり論文について教えていただろうかと自戒することになってしまった。かつて論文を手書きし、ロットリングとタイプライターで清書して航空便で投稿していた時代があった。それに比べて現在の論文執筆作業はとても便利になったが、果たして論文を書くという作業に対する情熱をどれほど学生たちに伝えることができているだろうか。そんなことを考えさせられる一冊でもある。

それゆえ、これから論文を書こうとする皆さんのみならず、すべての研究者と大学教員にこの本を薦めたい。私の大学のある大学院生は、「この本を読んだら無性に論文が書きたくなりました!」と語っていた。10年後、日本の論文がV字回復を果たすとき、この一冊が大切な役割を果たしているに違いないと思う。

草野完也（名古屋大学太陽地球環境研究所）